最後まで自分らしく生きる講座
第４回「在宅療養の話」要旨
医療法人社団爽秋会　岡部医院　佐藤隆裕

平成２８年１０月１４日金曜日、名取市相互台公民館において、上記講座を開催した。対象は名取市相互台にお住いの方で、５０－７０歳代を中心して１４名ほどが参加された。参加者の中にはがんサバイバーもいらした。

本講座については、「最期まで自分らしく生きる」「在宅療養の話」というテーマを踏まえ、がん終末期患者の在宅療養を念頭に置いて講演を行った。内容については、１「治療から緩和ケア」、２「在宅緩和ケア」、３「社会資源の活用」、４「よくある質問」の４単元と、最後に自宅で最期まで過ごした事例を紹介した。

１「治療から緩和ケア」

がん治療と緩和ケアの関係モデル図、緩和ケアの定義、疾患群別予後予測モデルを紹介し、生命を脅かす疾患から死に至るまでの軌跡については「がん」「臓器不全」「老衰」の３パターンがあること、がんの経過は終末期において急速な身体機能の低下を来すことについてお話しした。

２「在宅緩和ケア」

在宅医療を受ける対象が通院困難な方であり、通院困難の判断については障害高齢者の日常生活自立度を参考として、準寝たきり以上のいわゆる外出時に手助けが必要な方であることをお話しした。

がん終末期の急激な経過を踏まえ、事前に意思決定を行うことの難しさ、代わりにアドバンス・ケア・プランニングを行う必要性を述べた。アドバンス・ケア・プランニングを理解していただくために、以下の２つの例を紹介した。１つめはタレントの太田光代さんが自身の母を介護された時に、療養場所の判断や介護への心構えを作るうえで、話し合いが有用であると感じたことを記事から引用した。２つめはやはりタレントの小林麻央さんのブログから、将来を踏まえて行動することの重要性について紹介した。

平成２５年の国民アンケート「人生の最終段階における医療に関する意識調査」から、がんが進行した状態でも４割弱の国民は在宅療養を希望しているという内容について紹介した。

３「社会資源の活用」

在宅療養を支えるためには介護保険が必要であること、介護保険でどういった支援が得られるかの簡単な概要を説明し、平成２０年の国民アンケートから国民の多くは自宅での療養を希望するが、最期まで療養できるとは考えられていない、理由は「家族に負担がか

かるため」が最も多くの回答者から挙げられていることについて紹介した。

４「よくある質問」

在宅療養のイメージ作りに必要と思われる内容について、Q&A 形式で紹介した。Q「在宅療養ってどういうもの？」A：病院での療養との対比、Q「緊急時の対応は？」A：２４時間対応、Q「在宅医療を受けたい場合は？」A：病院や地域の窓口の紹介、その他についてお話しした。

最後に３つの事例を紹介した。

１つ目に、膵癌を患い最期まで自宅で過ごした６０歳代男性の事例を紹介した。膵癌の進行とともに衰弱が進む中で患者本人が口にした「苦しいけど幸せ」という言葉が印象的だった事例だった。

２つ目に、乳癌を患い最期まで自宅で過ごした３０歳代女性の事例を紹介した。小さな子供を抱える方で、死を迎える準備が十分に出来ないままの退院ではあったが、家族に見守られながら最期まで自宅療養を続けた事例だった。

３つ目に、膵癌を患い最期まで自宅で過ごした６０歳代女性の事例を紹介した。自宅での療養を続ける中で、療養場所についての考えが変わり、最後まで自宅での療養を続けた事例だった。

以上の内容で１時間半の講演を行い、講演の内容にとどまらず在宅療養に関する活発な質疑が行われた。地域住民の在宅療養に関する関心の高さに触れ、今回の講演のような小さな単位での啓発活動の必要性を大いに感じた次第であった。